

## インターンシップで得た学び

尾崎 遼平

2ヶ月間のインターンを通じて、20年間の自分の人生では知り得なかった様々な価値観を学ぶことができ、「当たり前」は「当たり前」でないことを痛感しました。

まず初めに、私がインターンを試みようと思った契機について述べさせていただきます。私は高校2年生の時にシンガポールで1週間程度働いた経験があり、そこでアジアの発展や経済の歴史、文化の違いに非常に関心を抱き、私たちが今いるアジアのことについてもっと知りたいと考えるようになりました。勉強していく中でそれらを知識としては得ることができたのですが、実践的な活動を通じてそれらを身を以て知るということを求めていたのです。また、大学1年ということと新型コロナウイルスの状況下にて海外渡航が難しくなった故、何か今できる新たな経験をしたいと強く感じ、JFCネットワーク様にてインターンを希望いたしました。国際色豊かな学部で学んでいく中での国際問題への興味・関心の高まりや、長年培ってきた英語力を磨きたかったというのも理由としてあります。

さて、インターンシップでは主なお仕事として法的文書や依頼者の方々の身の上話のようなものの翻訳をやらせて頂きました。もしかしたら、これを読んでいる方は翻訳は地味な作業と思う方もいらっしゃるかもしれませんが。確かに翻訳は地道で骨が折れるお仕事で日の目を見ないけれども、必要不可欠なのです。なぜなら私は特にこれらを通して、直接的ではなく間接的に人を支えられることを学んだり、考えもしなかった世界について触れたりして、自分の大きな成長に繋がったからです。例えば、親と子どもが離ればなれになってしまったり、父親に認知を拒否されてしまったりといったケースを見て、それぞれのケースに家族がいることや事情も原因も異なるということを学びました。伊藤さんが「一度は恋愛関係になった間柄なのに、このように裁判になってしまったり、もつれてしまうのはどうしてだろう」といったようなことをおっしゃっていましたが、本当にこれは悲しいし考えれば考えるほど、貧困・DV・戸籍の問題など根底にある原因が複雑で一筋縄ではいかないような難しい問題だと感じます。さらに、翻訳をしている最中に感情移入してしまうこともあって、よく私たちが言う「普通」って何なんだろうと考えたり、私立大学まで何の不自由もなく進学できている自分との乖離を感じたりして、自分自身がいかに恵まれているのかと身にしみて思いました。新型コロナウイルスの影響を受けて実際相談者の方が来ることはあまりないのですが、直接拝見する機会があって、その時にはこの方々のようなために働いているとより実感することもできました。

最後に、こちらで「人のため」「公益のため」にやりがいを感じながら働いた経験から、以前より目指していた夢である在外公館で国益のために働き人と人とを結びつけられるような人材になることへの熱意、想いが高まりました。これを通じて困っている人たち、すなわちケースが減っていけるようにも取り組んでいきたいです。このように思いを改めて強くしたり、芽生えさせたりするほどにJFCネットワーク様でのインターンシップは有意義なものでした。そして、これは伊藤さんや市原さんをはじめとするスタッフの方々の協力がなければなし得なかったことです。また、雰囲気も温かく第2の家のように感じて安心して活動することができて、とても感謝しております。この経験で培った大切なものを忘れずに、大学生活だけでなく今後の人生に役立てていきます。受け入れてくださって本当にありがとうございました、またご縁がありましたらその時はまたよろしく願いいたします。